

教育実習の 報告

教育実習で学んだこと

岩野 里奈

(国際言語文化学科)

私は教育実習に行く前、生徒の勉強に支障が出ないように授業をこなすこと、楽しく過ごすことを目標にしていた。今回私は、1年4組担任の国語科の先生のもとで中学1年生の国語科の授業をさせていただいた。授業観察は1年生だけでなく2,3年生、国語科以外の授業も観察した。実習中は体育祭もあり、年間行事の一つを先生として体験した。

今回の実習で学んだことは多くあるが、その中でも印象に残った二つのことについて記す。一つ目はもちろん授業を行ったことである。授業観察中に、板書の構造、ICTの活用方法を先生方の授業から学んだ。板書の構造は、チョークの色分け、板書のタイミング、内容を意識しながら行うことで授業の内容が分かりやすくなることが分かった。また、ICTの活用方法は、テレビや映画のワンシーンを見せ理解を深めさせることも一つの方法として挙げられると気づいた。観察した授業の中で私が最も感動したのは、2年生の敬語の授業である。授業の前に先生が生徒と会話をしながら敬語に直すべきところを板書した。それから始まった授業は生徒も正しい敬語を自ら考え、積極的に発言し活用しようとしていた。授業が終わったあとも、授業内容を把握しほかの教科の先生に敬語がつかえるようになったと生徒が自慢していた。その時、研究授業では私も同じように生徒が「分かった!」と楽しそうに言える授業にしたいと感じた。研究授業の準備を行っている際には、担当教員の先生や国語科の先生方とお話をさせていただく中で、授業の目標について考えさせられた。古典の授業の場合、ただ親しみを持つという

も内容を教えて古典文学の知識を増やすのか、内容も踏まえながら古語を読めるようにするのか、それを考えるだけでも授業の構成は変わっていく。さらに、テストで得られる結果やその先に生かせるかどうかが決まっていくことが分かった。実際に研究授業をして、時間配分と授業の流れ、板書をすべて頭に入れた状態で授業をすることの難しさを感じた。研究授業の前に他クラスで同じ授業をさせていただくことができた。しかし、同じようにはできなかった。同じ内容でも生徒が違えば理解のスピード、書くスピードも様々で、決めた時間通りに行うことができなかった。また、私の場合は細かく時間を区切りすぎていたため焦ってしまい後でうまくカバーをすることができなかった。授業の流れや板書の計画は頭に入っているほうがいいことはわかっている。だが、生徒の反応を見つつ、机間巡視を行いながら、授業を進めていくと次にするはずだったことが何かわからなくなってしまった。

二つ目は言葉が与える影響力だ。皆さんは「言霊(ことだま)」をご存じだろうか。「言霊」とは日本人は古くから言葉には魂が宿ると信じており、言葉には力があるとされていた。私は高校生の時担任から教わった。それからずっと人に対して意見を言うときには考えて言うようにしていた。実習中に私が担当していたクラスでは「黙れちゃ」「あのいきらーい」のような言葉をよく耳にした。それに対して私は心の中では「そんな言い方しなくても」と思いつつ、実際には「静かにしようね」「嫌いじゃない」と生徒に言った。ある時、授業前に担当教員から少し生徒たちのことを見てほしいと言われ、一人で生徒たちが授業前の黙想をしているところを見ていた。すると、数名の生徒が学級委員の生徒に対して「ウザイ」といった発言をしていた。学級委員の生徒は泣き出してしまい私はどうしたらよいかわからなくなってしまった。私は学級委員の生徒を慰めることしかできなかった。しばらくすると、担当教員が戻ってきたため事情を話した。担当教員はまず、生徒全員になぜ学級委員が泣き出したのか、最近のクラスの雰囲気はどうだったかなど、今に至る経緯

を確認した。そして、「授業中にも言ったけど、もう少し相手の立場になって発言をしなさい。最近のみんなの言葉遣いは相手の気持ちを考えられていないと思うよ。」と言った。次の授業は国語の授業ではなかったが、だからこそ感じたことは言葉の大切さである。国語はほかの教科と違い普段の生活や他教科中も使用する、学べる教科だ。普段から言葉の大切さを理解させ、たった一つの言葉で他人を傷つけることも喜ばせることも簡単にできてしまうことを私も生徒と学んだ。そして改めて私があの時とるべきだった行動は、生徒全員に原因と今後生徒がとるべき行動を考えてもらうことだと学んだ。その数日後、生徒たちがお互いに励ましあいながら体育祭に臨んでいる姿を見ることができた。

今回実習に行き、やはり教員採用試験を受ける前に実習に参加したかったと強く感じた。

私は実習で先生として過ごす中で楽しさや達成感を感じた。授業づくりはもちろん大変だった。しかし、その分、終わったあとに生徒からもらった「先生の授業、楽しかった！」という言葉がとてもうれしかった。

貴重な経験をさせていただけたことに感謝し、今後活かしたい。

実習は一日にしてならず

緒方 ありさ

(国際言語・文化学科)

日本のみならず、全世界にコロナウイルスの流行が広がる中、まさか自分の教育実習にまでその影響が出るとは思ってもみず、当初はひどく驚き、焦りを感じたことを今でも覚えている。春先に実施予定だった母校での実習は九月の頭に延期になった。中止にせず、延期という形をとってでも実施して下さった母校には感謝してもしきれない。そして何より、この延期で実習に備えるための時間を本来より多く得られたことは結果的に実習の成功に繋がった。そこで今回は実習に向けどのような準備をした

か、その準備がどのように功を奏したかについて書くと思う。

1. どのような準備をしたか

前期の間は対面授業が困難になってしまい、模擬授業をほとんど行えなかった。このまま実習に赴くには不安な要素があまりにも多かったが、それらを少しでも取り除くべく、とにかく教材研究を緻密に行い、できるだけ多くの指導案を書き、担当の先生に見ていただいた。その先生は度々「例え授業で使うところは少なくとも、なるべく沢山の準備をしておきなさい」と仰っていた。限りある時間の中で生徒に伝える分量は選別していかななくてはならないが、いつ何をどのように聞かれてもすぐに答えられるほどに準備をしておく必要があるということだ。扱う教材をしっかりと研究し、どういったことを伝えようと生徒の役に立つか、またどういったことを伝えようと生徒が興味を持ってくれるかを考え、それらを最終的には選別し、ひとつの授業を作る。ひとつの授業といっても、選別した内容を伝える手段はひとつでは決してない。教科教育法で学習した様々な教授法を思い起こしつつ、何パターンもの指導案、授業展開を作った。実際にこれらに沿った模擬授業を実施できなかったことは心残りであったが、教材研究の重要性を知ることができ、また指導案の作成に慣れることができたことはこの先の自分を大いに助けてくれた。

2. 実習での成果

私は母校の国際コースに在籍する一年生を対象に授業を行った。「本学には様々な科、コースがあり、さらにはクラスによって雰囲気も全く異なる。それぞれでどんな英語の授業が行われているのかを観察し、そこから考察することは今後の授業づくりを必ず助けてくれる」と担当教諭の先生にお言葉をいただいたため、様々な学年の様々なクラスで見学を行わせていただいた。先生の仰る通り、同じ科、コースであってもクラスごとに学力、雰囲気、英語への関心は全く異なっていた上、その時々で生徒の授業

への関心も異なっていた。指導案や展開案の作成を中心にしっかりと準備を行ってきたつもりであったが、私の行っていた準備は生徒観の考察が乏しく、どのクラスに対しても同じような授業が行えるとはばかりに思って用意した展開であり、これではどのクラスにも適さない授業になってしまうと痛感した。もちろん、実習前の段階で、生徒が目前にいない状況の中で考えたものであるため、仕方がない面もあったが、それでも今回の実習で行なった見学を通じ、「科やコースは関係なく、それぞれのクラス、そこに在籍している生徒の観察なくして授業は作ることができない」と感じた。そのため、研究授業を実施する二週目の金曜日に向けて、私はできる限り多くの時間を担当クラスで過ごした。朝の小テストを実施したり、朝礼や帰りの学活に参加したり、小テストの追試や清掃にも参加した。校内にいる時間の多くを生徒と過ごすことに割いたことで、次第にどの生徒がどれくらい発言してくれるか、どれくらい中学校段階までの英語を理解できているか、どんなアクティビティを入れると積極的に参加してくれるかが少しずつ見えてきた。もちろん、二週間という短い時間の中で何もかもを把握し、それを自分の授業に生かしたとは思えないが、最後の研究授業においては、初めて授業を実施したときとは比べ物にならないほどスムーズに展開でき、また生徒たちも積極的に授業に参加してくれた。指導案の中にある生徒観の項目が、他の項目と同じくらい、むしろそれ以上重視するべき点であることは実際に実習に行ってみなければ理解できなかった点であっただろう。あれだけ行なった準備でも不足はあったが、それでも教材研究を効率よく行えるようになっていたからこそ、指導案の書き方に慣れていたからこそ、生徒と共に過ごし、観察する時間を多く設けられた。行ってきた準備にそのように救われたことから、備えることの重要性を改めて強く感じる二週間であった。

タイトルはお分かりの方も多いただろうが、「ローマは一日にして成らず」という諺をもじったもので

ある。ローマ帝国が長期にわたる積み重ねの上に築かれたように、教育実習もまた小さな積み重ね、つまるところ準備を積み重ねていった先でようやく成功するのである。今後実習に赴く上で、是非ともこの言葉を心の端に留めておいていただければ幸いである。

“経験”という教材

戸高 莉緒

(史学・文化財学科)

はじめに

私は、8月31日から9月19日の3週間、母校の中学校で教育実習を行った。教科は社会、担当学級は2年1組であった。授業は歴史的分野を担当させていただき、計16回行った。コロナの影響により、予定より3か月遅れての実施となったが、体育祭という行事にも参加させていただくことができた。ここでは、私が実習で目標としていたもの、“実習生”の教員とはどのような存在であったかについて報告する。

実習で目標としていたもの

私はこの教育実習を通して、現在の教育現場の現状や、子どもたちにとって「教員」とはどのような存在であるのかをじっくり学びたかった。そのため、授業プリントや板書計画、学習指導案の土台を実習初日より前に全て完成させていた。なぜならこれらの作成や準備、提出期限に追われ、生徒たちと触れ合う時間や教育現場の現状をみる時間が減ることを恐れたためである。

実習初日を迎え、第1週目は社会科の先生方の授業観察をさせていただいた。パワーポイントを使った授業や、発問の仕方、生徒を答えに導くヒントの出し方など、それぞれの先生によって違い、自分の授業において足りないことは何か、身に付けなくてはならないスキルとは何か見つめ直すことができた。そして第2週目、授業をさせていただくことと

なった。私は、歴史の用語や事象をただ教授するだけでなく、「なぜ」を考える授業」という生徒自身が課題を発見することができる力を養う授業を目標としていた。実習開始以前は、アクティブラーニングの一環として、地図や資料を活用しながら他者との交流とともに答えを考えるグループワークを積極的に取り入れようと考えていた。しかしコロナの影響により、グループでの活動は難しかった。そのため実際の授業では、パワーポイントのスクリーンに地図や資料を大きく表示し、生徒と教員が同じ資料を同時に見て考える授業を行った。また教員の発問に対する回答は、生徒を指名するのではなく自由に発言してもらうようにし、その発言に対して教員が一つひとつ対応していく形をとった。これらの活動を行うために、席が近い生徒同士で自由に話し合う時間と、生徒が発言する時間とその回答をまとめる時間のメリハリをつけ、1人の生徒の意見をクラス全員と共有し、他者の意見を踏まえながら生徒自身の考えを深めることができるようにした。またパワーポイントの赤字は自分の覚えやすい色のペンでワークシートに書いて欲しいこと、教員である自分の声が聞こえにくかった場合や板書の文字が見えにくかった場合は、遠慮せず手を挙げて教えて欲しいことなど、生徒にとって学びやすい環境を作ることに努めた。

“教員”としての実習生

教育実習では、教員を志す者として先輩である先生方から授業や学校について学ぶ1人の学生でもあるが、生徒にとっては1人の大人であり教員である。先生方からは、授業だけでなく生徒指導、学校運営について見せていただき、自分の知識のなさ、未熟さを痛いほど痛感し、これから教員として成長する糧を沢山教えていただいた。それでは、この3週間で教員としての私から、生徒達に与えられるものとはなんだろう。この疑問を解決に導いたのは、指導教官である先生が仰った「先生のこれまで歩んできた人生の話を沢山してあげてくれ。」という言葉だった。この一言を基に私は、教科書の内容だけ

でなく、大学生活について、自分の中学時代について生徒達の前で沢山話した。すると生徒達は、それらの私の話を目を輝かせながら聞いてくれた。年が近い実習生の話は、生徒達にとって未知な未来を具体的にするのはないだろうか。このように、教員自身の経験が生徒にとっては大切な教材になることを身をもって学んだ。

1人ひとりと向き合う大切さ

教育実習は授業をすることだけが目的ではない。生徒達にとって教育実習生は、年齢も近く、親しみやすい存在であるかもしれない。そのため休み時間や放課後には、担当する学年を超えて沢山の生徒達に話しかけてもらった。しかし生徒の中には、教員に関心がない生徒や、自分から教員に声を掛けることが難しい生徒もいるかもしれない。このような生徒にどのように対応するか？この課題について考えることが、私の通勤中の日課となっていた。私はこの課題を解決するために、生徒の名前と顔を覚え、毎日名前とともに一言でも生徒に話しかけることが大切であると考えた。まず私は、担当する1組の生徒達の顔と名前を逸早く覚え、廊下ですれ違った際は生徒の名前を呼んで挨拶し、毎日提出される日誌のコメントで生徒それぞれの部活や趣味を覚え、それらを話しかけるきっかけとした。また実習期間が体育祭と重なったこともあり、体育祭や日誌の話題を通して、多くの生徒に声を掛けることができた。最初は緊張していた生徒達にも、日が経つにつれ笑顔が増え、日誌に自分のことや相談事を書いてくれるようになった。短期間で大勢の生徒を理解しようとするは大変ではあるが、生徒という1人の人間を理解することはとても大切なことであることを学んだ。

おわりに

教育実習では、教員という職業の大変さを知り、今の自分の未熟さ非力さを痛いほど実感すると思う。しかしどの問題にも真正面から向き合い、多くの人と意見を交換することによって、解決への道が

見えてくる。そして、1人の人間としても大きく成長することができると思う。

また教材研究と同時にこれまでの自分の経験がとても大切になってくる。来年度、教育実習に行く皆さんは、教育実習で出会う生徒達にとって「教員として自分には何ができるのか」考えながら、教育実習まで様々なことを経験してほしい。未来を歩む1人でも多くの生徒の背中を押せるよう、教育について共に学び続けましょう。

「生徒のことを考える」

野邊 祐磨

(史学・文化財学科)

はじめに

私は10月5日から10月23日の3週間、母校の中学校で教育実習を行った。当初は5月下旬に実習予定であったが、新型コロナウイルスの影響で10月に行われた。教科は社会科(公民的分野)で、担当学年は3年生であった。授業回数は社会科が22回、道徳が1回の計23回行った。授業に限らず、担当クラスの朝の会や帰りの会、給食指導、総合的な学習の時間や学級活動でのサポートなど学級担任の業務と同じ業務を行った。また部活動(吹奏楽部)の指導も行った。ここでは、実習で心掛けたこと、学んだことを中心に報告していく。

見ただ目で生徒が話しやすくなる

教育実習がスタートした日は、緊張してなかなか生徒と話すことができなかった。次の日も話すことができず、その日の放課後に教科担当の先生との反省会で生徒と話すことができなかつた事を相談すると「かっちりした格好ではなく、ラフな格好で行くと生徒が気楽に話してくれるよ」とアドバイスをいただき、翌日から学校に着いたらラフな格好で一日過ごす生徒から話してくることが増えた。また、朝のあいさつ運動や部活終了後の下校指導にも積極的に参加し、生徒との会話を増やしていった。実習最

終日まで実践し、担当していた3年生だけでなく、他の学年の生徒からも声をかけてくれるようになったため、見ただ目で話しやすくなることを学んだ。

生徒にわかりやすい授業を構成する

私が実習期間で最も心掛けたこと、学んだことは「授業」に関することである。教育実習で最初に授業を行ったのは実習4日目で2クラス授業を行った。授業を行うまでに教科担当の先生の授業を参観したり、他の社会科の先生の授業や他教科の先生や教育実習生の授業を参観したりして、私なりの授業を構成していった。しかし、担当した授業の範囲が公民的分野であったため、地理・歴史に比べ知識量はほとんどなかったため、授業準備は念入りに行った。特に授業の構成を考えることでは自作で授業構成ノートを作成し、それを基に授業の流れや板書計画をまとめていった。そのまま授業でも活用できるため大いに役立った。教材研究は時間をかけて構成することに無駄はないため、大学の教法で模擬授業を行う際は時間をかけ、授業の構成を考えると教育実習で苦労することはないと考える。また授業でパワーポイントを用いたが、その際に中学生が食いつきやすい画像選びに注意しながら作成していった。あくまでも私(先生)が理解できる授業ではなく、生徒が理解できる授業の構成や実践を行うことが大事であることを実習で学ぶことができた。

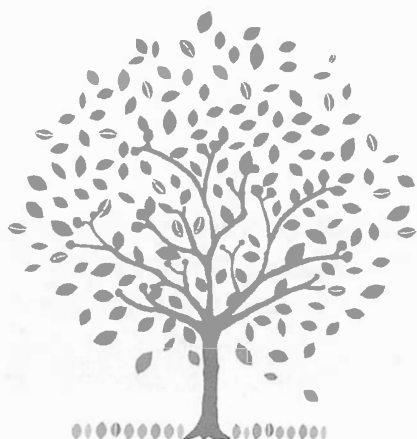
時には注意し、時には見守ることも大事

学級担任の業務では、実習全体を通してなかなか注意することができなかつたと感じている。注意してもすべきことをしないことがあったりして困ったことがあった。学級担任の先生から「注意でもきちんと指示をしないと生徒はすべきことはしてくれない、そして時には見守ることも大切」とアドバイスをいただいた。そのことを意識しながら注意するとききちんと取り組んでくれる生徒も増えたので大切にしていきたいと思う。また空き時間で生活の記録や宅習のチェックを行う業務があったりして学級担任を持つと大変であるという事を学んだ。空き時

間がないこともあると学級担任の先生から話をしていただいたので本当に大変な業務であることを知った。生活の記録や宅習のチェックの他にも朝の会や帰りの会、給食指導なども行い、授業の準備や実践と並行しながら業務をこなすことの大変さを感じた。

おわりに

教育実習を終えて、生徒のことを一番に考えて授業や業務を行わないといけない職業が教員であることを学んだ。大学の教育法では味わえない授業の雰囲気が一番体感できる場が教育実習なので、大学の教育法で模擬授業をする際は対象学年を意識して授業を行うと実習に行った際、苦勞することはないと思う。実習期間中、教科担当の先生と毎日2時間程反省会や授業のことでの相談を通して、授業の質や生徒のかかわり方が変わったので積極的に担当の先生に相談することは大事である。また空き時間があれば、積極的に他の先生の授業を参観し、同じ教科だけではなく他教科の授業を参観することで教授法のレパートリーが増え、自分の教授法に生かせると思う。実際にパワーポイントの作成の仕方やグループワークの方法を学び、私の授業で生かすことができた。生かせることができることはどんどん取り込んでください。これから実習に臨む皆さんが充実した実習になることを心から願っています。そして、生徒のことも考えられる“先生”になれるよう共に成長していきましょう。



「教育現場で働く ということの意味」

光山 勇氣

(史学・文化財学科)

はじめに

私は6月15日から7月3日までの3週間、母校の中学校で教育実習を行った。そこで学んだ教育現場での実態や学校で働く意味をこの報告で取り上げたいと思う。

教育現場で働いてみての初の実感

私が今回、母校で教育実習を受けて学んだことは多くあった。具体的には教師の職務の実態や学年・学級・生徒ごとに状況を把握すること、指導案作り・教材研究などの授業づくりと様々なことを学び、実施してきた。そして、一つ一つの職務に心血を注いで仕事に励まされている先生たちの仕事ぶりを見たり、自分自身が実際に働いたりして、教育現場で働くことの大変さを思い知らされた。

「これから教育現場で働いていく教員は生徒に知識を与えるというよりは、覚えた知識をどのようにして将来の仕事や実生活に結び付けるかが生徒には重要であり、それをいかに教師が身に付けさせられるかが大事なことになる」と私を指導して下さった担当の先生に言われ、その意見に賛同しつつ、難しいことだなと感じた。

私も三週間実習を行ってきて、生徒たちが将来活用できるような力を養い、サポートできるかがとても重要になると感じ、社会の授業や生徒指導など多くの場面で工夫した指導ができるのかが教師に任された使命だと思った。

授業では地理の授業を行ったが、実習先の中学校の生徒たちは積極的に授業参加してくれたので、授業を展開する側としては円滑に進めていくことができたと思った。しかし、初めの頃は、教科書の重要な箇所をいかにして生徒に伝えるのが良いのか分からず、何度も失敗して、その度に担当の先生と一緒に

に試行錯誤していった。実習に行く前は、大学でも何度か模擬授業を行っていたので、生徒の学習状況や学校の教育方針に照らし合わせて、授業づくりをすれば、それほど問題無く授業ができるだろうと正直教員の仕事を甘く見ていた。よって、初めから痛手を被る形となり、落ち込む場面も多くあり自分自身教員に向いていないのではないかと思悩むこともあった。しかし、教員の職務の厳しさや就職してから退職するまで教員自身も学習する立場でいなければならないという覚悟などを学べた。生徒たちの導き手としての使命感を持つことができた、貴重な教育実習だった。

実習初日から4日間は定時で帰り、家で残りの仕事を行っていたが、教員である父親と母親に学校に残って担当の先生や同じ科目の先生に何故授業の仕方や学級経営、校務分掌についてなど教えを乞わないのかなどと酷く怒られ、私自身気付くのが遅かったと後悔し、自分が教育現場での仕事をなめていたと深く反省した。この内容を翌日、担当の先生に打ち明ける機会があったのだが、「今日からでも遅くないから大学に戻るまで多くのことを学んで、近い将来働くことになる学校で実習の経験を活かして仕事を頑張ればいい」と温かく指導していただいた。

「誰にでも失敗はあるのだから、後悔するのではなくて、前向きに捉えて頑張っていけば、同僚の先生方にも支えてもらえる」と言われ、私もこれから正式に教員として認められるまで、また働き出しても使命感を持ち、仕事に取り組もうと奮い立たせられた。

教育現場で働く意味と覚悟

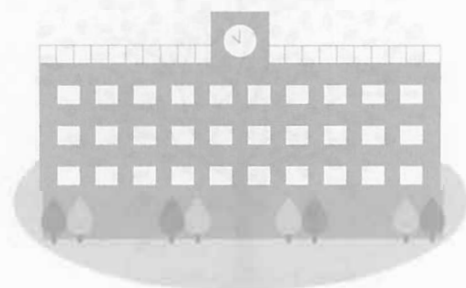
今まで実習の体験談を語ってきたが、私の教育に対する姿勢であったり、覚悟であったりと足りない部分も多くあり、教育実習では失敗を重ねてきた。実際、この文章を読んでいる学生も体験談を聞いて、正直実感が湧かずに戸惑っていることだと思う。実習が終わった後、他の学生にどのような形で教育実習を行ったかを問うと、様々な意見を聞くことができた。その中には、ほとんど模擬授業は

せずに担当の先生の授業を観察したという話や担当の先生が指導案をほとんど作ってしまったなどという話も聞いた。しかし、これらの大きな試練を受けずに実習を終える場合もあれば、私のような教育現場での実態を痛感する場合もあるので自分が本当に教員になりたいと思っているのか、今一度考えてみるとよいのではないだろうか。私は大学2年、3年と歴史の学習を中心に勉強していて、教職は二の次になっていた。そのため、自分から進んで教職の担当の先生方や教職課程の先輩方と話すことはしていなかったため、様々な意見や体験などを得る機会と思って、今後教職を目指す学生の皆さんは聞きに行ってもらいたいと思う。

おわりに

最後に、教職に携わる仕事に就こうとしている学生に言っておきたいことがある。

教職の先生方や先輩などにも言われていると思うが、教員採用試験に受かる事はさほど難しい事ではないと私も思う。但し、実際に正式教員に任命されたり、臨時講師として働き始めたりすると使命感や覚悟の質によって大きく職務に差支えが出てくると思われる。それほどに教員として働くということは過酷である。しかし、児童生徒に物事を教え、学習のサポートをすることに生きがいを感じたり、教育の面で社会貢献をしたいと思って教員を目指しているのであれば、教科指導の仕方や教員採用試験の勉強だけでなく、人との付き合い方や子供にどのように接するのが良いのかなど多角的な面で学んでほしいと思う。



経験を通して初めて分かるもの

矢野 光咲

(国際言語文化学科)

はじめに

私は8月31日から9月18日までの3週間、母校の中学校で教育実習を行った。ここでは、私が教育実習を通して学んだ事、感じた事について振り返る。

個人を知り、クラスを知る事

私が授業を行う前に最も意識して行った事、それは個人を知るという事だ。最初の1週間は、とにかく多くの授業を見学し、その様子や発言内容など細かくノートに写し、休み時間は多くの生徒と関わり、生徒を理解する事に努めた。授業とは、生徒あって初めて成り立つものだ。生徒についてしっかり知っておかなければ、クラスで授業を行う際、どのような声掛けが適しており、どのように進行するのが良いか分からない。私も実習に行く前から様々な生徒がいる事は予想していた。クラスとなれば、全員が全員真面目である事も、反対に不真面目である事も無い。そのクラスの中に大人しい子もいれば、明るい子、勉強が得意な子、苦手な子といるため、多少誤差はあるにしても大体同じスピードで授業が進んでいくのではないかと考えていた。合わせて個人について知っていれば、一人一人に対する質問の投げかけ方等も変えられるだろう。そんな考えを抱きながら、自分の授業に臨んだ。そこで感じたのは、生徒から返ってくる発言の量がクラスによって全く違う事だ。これは、そのクラスに明るい子、勉強が得意な子、もしくは大人しい子、勉強が苦手な子ばかりが固まっていたわけではない。クラスで出来上がった雰囲気があるためだと考える。比較的大人しい子が多いクラスであっても、授業中に沢山発言が出る事もあるし、反対に元気な子が多く休み時間は大声で話しているのに、授業になると途端にシーンと静まり返ってしまう事もある。私が感じたのは授業中に発言ができるかは、その子の性格だけ

でなく、そのクラスに発言しやすい雰囲気があるかどうか重要だという事だ。個人を知る事は大切であるが、クラス全体の雰囲気も知っておかなければならない。この事を踏まえ、授業作りをするうえで、「クラスの雰囲気を知る事」「どうしたら発言しやすい授業にできるか」を考える事が重要であると学んだ。

教師の雰囲気と授業の雰囲気は出来る

先ほどの点を踏まえ、私は教育実習で「授業中のクラスの雰囲気は教師側によって作られる」という事を強く感じた。私は今まで生徒との信頼関係が厚い教員ほど授業中生徒に集中して取り組んでもらえるのではないかと考えていた。勿論、生徒との信頼関係を築く事も重要だ。しかし、今回の実習を通じてそれだけでは無いと感じた。生徒の発言や意欲を引き出すために最も重要なのは、教師側の雰囲気である。私は実習中生徒と関わる機会も多く、休み時間に話す事が多かった。そのため授業の際も同じように活発な雰囲気と終始取り組めるのではないかと考えていた。しかし、私が行った最初の授業では緊張のため声が小さくなってしまい、つられて生徒の発言の声も段々小さくなってしまった。この点を踏まえ、次の授業からは意識して最初から自分の声のボリュームを上げ、また、生徒が発言しやすいよう、声を出させる機会を増やす事で発言への抵抗を減らせるよう試みた。これは非常に効果的で生徒からの反応が良くなったように感じる。教員が緊張すると、生徒はその緊張を鋭く察知し、クラスに伝染する。そのため、授業中は意識的に声を大きく出す事が授業を盛り上げるために非常に効果的だと感じる。

生徒は教師を選べない

「生徒は教師を選べない」という言葉を聞いた事がないだろうか。私は実習中この言葉について何度も考えさせられた。初めての授業の際、私は緊張から思ったように授業が進められなかった。そのため、その都度指導案を改良し、回を重ねるごとに授業のクオリティは上がっていった。これが模擬授業

なら上出来だ。しかし、実習とはいえ私たちは教壇で授業をする以上、生徒にとって教師であるのだ。同じ授業は一度しか行えない。上手く行えなくても、スムーズに進んでも、その授業は履修済みと扱われる。「初めての授業だから仕方ない」では済まない。そのため、慣れないうちは特に念入りに授業準備をしておく必要がある。私は、授業の前によく短冊カードを作り、授業では時間短縮できる部分は基本貼るだけにして時間配分を行っていた。しかし、最初のうちは、「このくらいは板書で間に合うだろう」と、カードを作らない部分も多く残していた。だが、慣れないうちの授業は、生徒から予想外の返答がくる事や、回答に予想していた時間内に終わらず延長する事、反対に予想以上に早く終わってしまう事など、様々なハプニングが考えられる。授業前に念入りに準備する事で、ずれた時間をどこで調整するかも考えやすく、予期せぬハプニングが起きた時でも、安心して調整ができる事を学んだ。一度しかない授業だからこそ、教師も真剣に準備をしておく事の重要性を感じた。

終わりに

これから教育実習を迎える人の中に緊張や不安でいっぱいな人も沢山いるだろう。私もその一人だった。また、周りにも実習を目前に辞めてしまう人、教師になる気がないからと途中で辞めてしまう人もいた。しかし、私はもし迷っている人がいるのであれば、ぜひ実習に臨んでほしいと思う。ひょっとしたら「迷うくらいなら失礼だから行くな」という意見があるかもしれない。私は迷うのであればより行ってほしいと思う。教師は確かに大変な仕事だ。しかし、それでも多くの教師が多忙な業務をこなしながら何年も続けるのは、それほど教師という仕事に魅力があるからだろう。せっかくの教育実習、「教師」という仕事を体験できる貴重な機会だ。知らずに終わるのは勿体ない。「ならない」と「なれない」では大きく違う。今迷っている人は迷ったままでいい、とにかく行ってほしい。

「栄養教諭実習生の立場から学んだこと」

若林 亜矢香

(食物栄養学科)

私は、5日間栄養教諭の免許取得のために母校で教育実習をさせていただきました。新型コロナウイルス感染症拡大予防のための特別な状態での実習となりました。5日間のうち実際に児童と関わることができたのは、3日間でそれも午前中のみでした。

児童と関わることができた3日間は主に授業見学をさせていただきました。先生方は「新大分スタンダードのすすめ」をもとに授業を作成していると聞いたので、特に1時間完結型の授業をどのように行っているのか、特別支援の児童にはどのように指導を行っているのかを集中的に見学しました。

1時間完結型には視覚で分かるように、赤色で目当てや課題を板書して、最後のまとめには青色を使用していました。特別支援の必要な児童には、他の児童よりも特に注意深く様子を見て、声をかけていました。ただ、考える場面では答えを与えるわけではなく、順序だてて答えることができるように思考の道筋だけを与えているように感じました。そのため、児童もしっかりと考え、聞くだけの授業ではなく自分で考える授業になっていました。

小学生だからこそその授業の違いも見ることができました。同じ先生でも、1年生に授業をするときと、6年生に授業をするときでは板書や集中のさせ方、言葉遣いにおいてすべて変えていました。1年生はまだ本格的な授業に入っていないため、授業を受ける態度について注意していることが多かったです。とくに、何かの作業や聞いてほしいことがある場面では必ず「先生がお話しするよ。手は膝に置いて先生の顔みてね。今から話すよ。」と声をかける場面を多く見ました。また、1時間で行う授業を一気に説明するのではなく、1つ終わったら次の動作の説明を細かくしているように感じました。

6年生は授業と休み時間がしっかり区別されてお

り、6年間で集中力や態度がとても成長することを実感しました。

少人数の学校のため休み時間は学年を超えて交流する姿を見ることができました。児童と休み時間に会話をする中で将来の夢を教えてくれたり、学校が楽しいと話してくれたりしました。その中には先生が好きという声も多かったのです。「先生が好きだから学校も嫌じゃないよ。勉強も楽しいよ。」という声も多く聞くことができました。児童にとって先生が好きということが意外と重要であることもわかりました。

特別な状況だったからこそ児童と交流のできない2日間は先生方とゆっくりお話することができました。どうして教員を目指そうと思ったのか、今までの教員をしてきた学校の特色もお話ししていただきました。母校の特色としては他と比べて穏やかでいろいろ体験ができると言っている先生が多かったです。

体験として、紙を作ったりシイタケを栽培したり、地域の方と料理したり、川で魚を捕まえたりと、田舎ならではの体験と地域の関わりの深さが羨ましい、この学校を卒業できたのはいいことだと言っただき、懐かしさとともにうれしくもなりました。

2日間で特に印象に残ったことは、人権講和と特別支援学級についてです。人権講和は今まで学習してきたものよりも明らかに興味深かったです。トリックアートを用いた実体験を交えることで、偏見や見えるものがすべてかなど考えさせられました。特別支援では特に食に関してお話していただきました。障がいを持つ児童に食べてもらえる工夫やなぜ食べないのかという論文をもとにお話ししていただきました。そのお話をきいて、先生として児童に食べてもらうということを考えるのも楽しいなと思いました。

最終日には、栄養教諭の先生の授業を見学することができました。栄養教諭は一般的に担任をしていることが少なく、いくつかの学校を掛け持ちで行っているため、メリットとしては、媒体を多く準備できることや身近な給食で児童が想像しやすいことだ

と教えていただきました。媒体は児童の印象に残りやすく、1年前の話もしっかりと覚えている児童が多かったです。また、給食も簡易給食の期間でしたが児童の準備を一緒に行ったり食べている様子を見学させていただいたりしました。給食を減らしたり残したりする児童はいなかったのも、そこは栄養学を学んでいる私から見てもとてもうれしかったです。給食がおいしいという声も児童からたくさん聞けたので、それだけで実習に行ってよかったなと思いました。

5日間のうち児童と関わることができたのは3日間という短い実習の期間でしたが、児童と関わる楽しさや難しさ、先生としてのやりがいを感じることもできました。教員を強く志望していない私でしたが、2日間、先生方と十分に交流できたことが私にとってはとても貴重な時間でした。改めて実習を通して、教員という職への関心を深めることができました。この経験は教員職以外でも必ず役に立つので、大事にしたいと思いました。

